
すべてはあの日の過ちから

薔薇園 美咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてはあの日の過ちから

【Nコード】

N6563F

【作者名】

薔薇園 美咲

【あらすじ】

仕事を頑張る彼と付き合って半年 ……。久々のデートだったのに、急に仕事が入ったから断られて、ついつい怒っちゃって……謝ればまた一緒にいれるって思ってたのに……。どうしてこんなにややこしいコトになっちゃったの？ カプは秀一×ジヨディで、ジヨディの一人称です。舞台は日本ではなくアメリカです

episode : 1 突然の電話（前書き）

組織は崩壊、来葉峠でのキールと赤井の出来事はナシか、赤井が奇跡的に生きてたつてコトでお願いします。こちらの都合上、原作を無視しますので、それでもいいという方はお読み下さい。

episode : 1 突然の電話

カレンダーに書き込んである今日の予定。スケジュール帳にも同じ言葉が書かれている。

“ シュウとデート ”

そう、今日は同じFBI捜査官の赤井秀一との久々のデート。もう少ししたら約束の時間だから、そろそろ家を出なきゃね。

鏡の前で最終チェックをし終わり、玄関に向かおうとしたらバッグの中の携帯が鳴った。

急いで通話ボタンを押して電話に出た。画面を見なくても、誰から分かる。

『 ジョディか……？ 』

「 シュウ？ どうしたの？ 」

落ち着いた口調の愛しい人の声。

『 お前に謝らなければならない 』

「 え？ なに？ 」

彼の言葉を待たずに私は聞いた。返ってきた答えは私にとって衝

撃的なものだった。

『今日、行けなくなった』

……え？ 今、何て言ったの？ シユウ？

私の頭の中は真っ白で、彼の言っている事の意味が分からなかった。

『ジヨデイ、聞いてるか？』

彼の声でやっと頭の中の整理が出来た。

“今日、行けなくなった”

「じゃあ、今日のデートは無理ってこと？」

『……そーゆーことになるな』

また？ また二人でいれる時間を削られなければならないなんて……。前にもこんな感じでドタキャンされたのよね。

『理由はな……』

「どーせ仕事が入ったんでしょ」

言葉を遮ると、電話の向こう側ではシユウが絶句している。……や

っぱりそうなんだ。まあ、彼が約束を断る理由はそれしかないんだけど。

もう何回目？ 毎回こうやってデート出来ずに明日を迎える。また多忙な日の連続。今日だって、やっと二人共久しぶりに休日が出たのに。

私の勘忍袋の緒が切れた。

「シユウっていつもそうよね。仕事ばかり優先して……。私はシユウの恋人でしょ？ 大切な存在なんでしょ？ 私たち、FBIでしょ？ ただでさえ死と背中合わせで……。明日からずっと会えなくなるかもしれないのに……。私との時間は大事じゃないの!？」

電話越しに怒りをぶつけ、その場に泣き崩れた。

「もういい！ もうシユウなんて知らないから！」

そう言って自分から通話を終えた。電話口で彼は謝ってばかりだった。

『すまない、ジヨデイ』と……。

episode : 1 突然の電話（後書き）

完結させる気力はあるのでよろしくお願いしますm (_____) m

episode : 2 不幸の発端

これから何をすればいいのだろう。さっきの電話でのシュウの声
が耳についたまま、消えない……。

今はすべての物が鬱陶しく見える。シュウからもらった物、シュウとのメールが入っている携帯、そしてその他の無関係な物たち。視界に入ってくるものすべてが邪魔だ。

エレベーターを降りて外に出て、一番に目に入ってきたのはカップルだった。

仲良く、笑い合いながら歩いている。本当に楽しそうな顔をしている。本当に幸せそうな顔をしている。

私も数分前までは、楽しそうな、幸せそうな顔をしていたはずなのに……。

シュウ、久しぶりにデートしたかったよ……。お願いしたら照れながらも繋いでくれる手、いつも私を気にかけてくれるところ、全部全部好きだった。

私が一方向的に怒って、勝手に電話切っちゃってごめんね。

シュウの仕事が終わった頃に、電話してみようかしら？

そんな事を考えていると、聞き慣れた声があった。

「ジョディさん？」

希望と絶望が入り混じった顔をしている私に声をかけたのは、同じFBI捜査官のアンドレ・キャメルだった。

「あ、もしかしてこちら辺が近所なんですか？」

「ええ、まあ……。あなた、こんな所で何してるの？」

「仕事が今日はオフなんで、有酸素運動をしてたんです」

……要は、あてもなく歩いてたって事ね。

キャメルの顔を見ていたら共通点が“暇”という事に気付き、ひとつ有効な時間の過ごし方を思いついた。

「どーせあなた、今日暇でしょ？ だったらちよつと付き合ってくれない？」

そう言つと、私は彼の返事も聞かずに腕を引き、喫茶店へと連れ込んだ。

このあと、この行為が不幸を招いてしまうなんて私は予想もしていなかった……。

episode:3 誤解が招く不幸(前書き)

サブキャラ(?)っぽいのにオリキャラが出ます。でもそんなに執着はないので、さっさと読み流しとして下さいm——(m

episode : 3 誤解が招く不幸

今までに入ったことのない喫茶店。見慣れないメニューを見ながら、接客してくれているウエイトレスにコーヒートを二つ頼んだ。

「あら？ コーヒーでよかったですかしら？」

勝手に注文してしまった後で聞くのもどうかと思ったが、確認のため尋ねた。

「正直、ミルクティーの方がよかったです……。甘党なんで……」

「あら、そうなの？」

そういえばコーヒを飲んでる姿なんて見た事なかったわね……。見た目からして甘いのが苦手なのかと思ったから、ブラック注文しちゃったじゃない。

「あの、ジョディさん……」

「なあに？」

キヤメルが突然口を開き、さっきの思い出しただけでも頭にくる話を持ち出した。

「今日、赤井さんも休みじゃなかったですか？」

二人とも休みだからデートしてるんじゃないかなって思ったんで

すけど、と蛇足するキャメル。それを聞かれるのが一番つらいんですけど……。

別にそうしたい訳じゃなかったけど沈黙が続いて、やっと私の口が開いて言葉を紡げた。

「さっき、ドタキャンされたの……」

その言葉を聞き、キャメルは絶句。その後、何を言おうか考えて苦笑いしながら、そーゆーこともありますよね、とフォローしてくれたけど、ここまで言ったら全部言わなきゃ気が済まないわよ。

「いきなり携帯に電話かかってきて、今日は無理だつて……。久しぶりのデートだったのにね……。シユウは“恋人の私”じゃなく、私よりも近くにいる“仕事”を選んだのよ……」

「ジヨディさん……」

「シユウは……私よりも仕事の方が大事なのよ……！」

それから先の事はあまり覚えていない。微かに記憶に残っているのは途中から英語で、わけのわからない言葉を泣きながら言ってい

たという事と、突っ伏して泣いている私の頭をキャメルが優しく撫でてくれていたという事 ……。

数時間経って顔を上げると、キャメルが戸惑っていた。私が泣いている間ずっとオロオロしてたのかしら？

そんなことを思いながら口を開こうとした時、どこかで聞いた事のある声がした。

「あれ？ ジョディ、こんな所で何してんの？」

そう言ったのは同じFBI捜査官のルーシーだった。その後、レベッカが言う。

「一緒にいるの、キャメル捜査官じゃん。赤井さんは？」

そして、ジョセフィーヌが私に追い打ちをかけた。

「あーっ、もしかして浮気？」

笑顔を絶やさずFBI内でも仲の良い、ルーシー・レベッカ・ジョセフィーヌ。でも、話す事といえば男の事か同性への愚痴。そんな三人が私は嫌いだった。

そして私が嫌ってる理由はもうひとつ……三人共、信じられないくらいのおしゃべりなこと。確かに沈黙が続く時間がないのは楽し

くて、勝手に話題作ってくれるから苦労しないでいいんだけど、人の秘密とか言いまくってるんだもの。相手の都合が悪くなったって、彼女たちには関係のない事なのよ。

そう、この三人に知られた以上は地獄の幕開け。

彼女たちに、こんな所で出会ったのも不幸だけど、本当の不幸はこれから……。

episode : 3 誤解が招く不幸(後書き)

オリキャラ3人の名前の由来はというと、、、ルーシー：塾でやってる英語の宿題に出てきて、ポピュラーな名前だから。レベツカ：……なんとなくですね。名前調べてたらあつたからかな。ジョセフ
イヌ：なんか頭に残ってた名前でした。ちなみに今日決まった部活のマスコットキャラは牛ホルスタインのジョセフィーヌ。命名したのは私です
^^；部活のコたち、気に入ってくれていたものでよかったです(^^
O) = 3長くてすみません・・・

episode : 4 地獄の幕開け

望んでもないのに来る朝。仕方ない、時は動いているから。そう言い聞かせるしかない。こうなってしまった以上、逃げる事は出来ないのだから。

重い足取りで職場に向かう。前までは楽しみだったのに、今は逆でもシユウとは謝るのも兼ねて会いたい。だけど、あの三人……ルーシー達には会いたくない。

そんな事を思っていると、知らない間に到着……。シユウはまだ来てないみたいだけど、そのかわりにルーシー・レベッカ・ジョセフイーヌの姿があった。

意地悪な笑みを浮かべ、近づいてくる三人。私を一瞥すると、すでに来ていた捜査官数十人に向かい、大声で言う。

「みんなー、ジョディって赤井さんときき合ってるじゃん？」

その事は、つき合い始めた頃からみんな知っていた。

ルーシーの言葉をレベッカが継ぐ。

「そのジョディが昨日、アンドレ・キャメルと一緒に二人きりで喫茶店にいたんだけど、どう思う？」

ジョセフィーヌは、昨日と同じような事を言った。

「それって浮気だよなー？」

そんなんじゃない。ただ、話をしただけ。それだけで浮気？私もキヤメルも、デートしてるつもりじゃなかった。相談にのってもらってただけなのに。

「ジョディ、二股とか許せない！あたしも赤井さん狙ってたのにいー！」

わざと頬を膨らませ、ぶりっ子するのはルーシー。

しかし私を見ながら小悪魔スマイルを浮かべるのもつかの間、彼女のブルーアイが見開かれた。

「低レベルな事はやめろ」

その場に冷めた声が響く。

「聞くに耐えないんだよ、馬鹿みたいな一方的争い。仕事くらい静かに出来ないのか？」

シユウの声。……分かってる。彼女たちに冷たく言うのは、自分と周囲の仕事をしている人たちの邪魔になるから。……分かってる、シユウが彼らの気持ちを代弁してるだけってことくらい。

なのに……私の事、庇ってくれたなんて思ってる。でもケンカ中なんだったら普通、まわりの人たちが困っても私の事なんて無視するはずよね？

「ジョーディ、行くぞ」

突然そう言われ、私は仕方なくを装い、上機嫌でついていく。

「さっきはありがとね、シュウ」

どこまで行くのか分からないけど、お礼は言っておく。

「何のことだ？」

彼がそう言うと、この話はもうおしまい。お礼を言われる事に慣れていないシュウが居やすい空気にするには、話題を変える事が一番手っ取り早い。

「シュウ、昨日の事だけど……」

いつから職場にいたのかは知らないが、こんなシュウの事だから三人が言っていた事は一部始終聞いていただろう。

しかし今の私には、キャメルとの浮気疑惑よりもシュウへ謝る方が先決だった。そして私が口を開こうとしたその時、

「キャメルから聞いた」

と、シュウの口からキャメルという固有名詞が出てきた。

「え？」

驚きに、ぬけたような声が出てしまう。

「昨日の夜、キャメルが俺に電話してきて謝ってたよ」

なんか勘違いしてない？ 私がこの話を持ち出したのは、謝りたかったからで、キャメルとの浮気みたいな事を弁解するつもりはないんだけど……。

「キャメル……なんて言ってたの？」

「『全部ジョディさんに聞いて下さい』だよ。あいつから言う事は何も無いぞうだ」

「私から言う事もないわ」

気づいたら、そう言っていた。

その言葉を聞き、そうか、と呟いてシュウは来た道に戻っていく。

「待って！」

もうひとつ、言いたい事がある。

「私が本当にキヤメルと浮気してたと思う?」

立ち止まり、私の問い掛けに直接イエスやノーは言わず、

「ケンカ中だったもんな」

と告げ、また歩き出した。

意味はきつとイエス。やっぱり誤解されてた。違うのに……。

でも、浮気の境界線ってどこにあるんだろう。

どこまでがセーフで、どこまでがアウト?

昨日キヤメルと会って、一緒に過ごさなければよかったんだ。昨日、家から出なければ……いつも通り、シュウの隣で笑っていたのにね。

そんな日々を取り戻すために話を持ち出したのに、結局謝れなかったなあ。楽しくて、平穩だったあの頃にはもう戻れない?

ならせめて、シュウだけでも返して?

彼がいるだけで、私はどんな苦痛な日々だって乗り越えられる。彼がいるだけでいいの。

何もいらぬ。何も望まない。平和も、富もいらぬ。世界中を敵にまわしてもいい。

だから、彼だけは ……。

episode : 4 地獄の幕開け(後書き)

プログラムですよね……(> > ……)
でもハッピーエンドになる予定
です

e.p.i.s.o.d.e.s 黒とじい色(前書き)

ジヨデイ視点ですので黒の組織を少し侮辱してると思いますが、>><

episode:5 黒という色

シユウに見放され、仕事を終えて夜遅くに帰宅。真っ暗闇の中、電気もつけずにベッドへと倒れ込む。

目の前に広がる闇。瞳を閉ざした時の色と変わらない、どこまでも深く、果てしない無限の色。漠然とした、でも微かに希望の見える白とは対比的に、見る者を絶望の淵に立たせるような残酷な色……。

私は無色透明なガラスの上に立っていたみたい。下を見れば、どこまでも続く漆黒の世界。

現状維持してれば良かったのにね。私は一気に白い世界から、暗黒の闇の中へと落ちたの。もろいガラスは少しの心の揺れでさえ簡単に壊れてしまうんだ。

黒い世界には希望もない。白とは別の意味の、無の世界。

黒といえば、ベルモットを思い出す。私の父を殺した、許してはならない人。何の躊躇もせず人の命を奪った、憎き相手。そして、その連中も同じ事を、同じ色をしている。

シユウも、あんな冷酷無慈悲な奴らと一緒にいたのね。捜査だったとしてもつらかったはず。そこで汚染されてしまったの？

そんな事を考えていると、だんだん目が慣れてきた。暗闇の中、微かに見える家具と、窓から入る光。光源は何なのだろう。いつも

なら好奇心が先走って、気になった物を調べてしまいが今はそんな
気力などない。

「黒……かあ」

天井を見上げ呟く。

シユウの色。ベルモットの色。ジェイムズのファミリーネームだ
ってそう。

黒って、ありふれた色ね。それとも、私のまわりだけ？

私も白から黒に染まっちゃった。だからそんなこと言えない。黒
って一見クールだけど、実は孤独の色なの？ 寂しさを隠そうと強
がってる色なの？

そつえば誰かに聞いた事がある。

黒や白、透明は“色”に入らないんだよ、って。

e p i s o d e : 5 黒という色(後書き)

“色”に入らない色は黒、白、透明の他に三原色、スペクトルです。辞典には『色に数えない時がある』と書かれていましたが、勝手に編集しました。> () <

episode:6 黒から白へ(前書き)

年賀状を書き終えたので投稿しました
アローを描きましたが手書きはキツイ<
す(^^);

ホルスタインとバツフ
毎年多いから疲れま

episode:6 黒から白へ

閉じた瞳を開けてみると、朝を迎えていた。昨日はあのまま眠ってしまっていたんだと気づく。幸いにも、時刻は5時。仕事に行くまでまだまだ時間がある。

二度寝は起きた時が面倒なのでしないことにする。だけど眠らない程度に目を閉じて、昨日の出来事を思い浮かべた。

一番に出てきたのはシュウの顔。寂しそうに言った言葉……。

『ケンカ中だったもんな』

どうしてそんな表情をするの？ 後味悪すぎよ。ずるいわ、卑怯よ。もう私たちは終わりなの？

過去のシュウに苛立ちを覚える。本当に、あんな終わり方だけではしたくなかった。怒られた方がマシに思えてくる。

こんなの、いくら思っても戻れないのにね。でも、終止符を打つたのはシュウよ？ 彼がその気なら、追いかけても意味がない。邪魔と思われるくらいなら、鬱陶しいと思われるくらいなら、潔く身を引いた方がいいに決まってる。だから頑張っただけであきらめる。そう出来るよう努力するの。

そう意を決した時、携帯が鳴った。

内心はシュウじゃないかと期待しながら、ディスプレイも見ずに通話ボタンをプッシュ。

「はい……?」

『あの、すみません……。私のせいであんなことになってしまった……』

ほんの少しの可能性を信じてみたけど、結果がこれ。電話をしてきたのはキャメルだった。

「あんなことって……シュウのこと?」

『はい……。昨日やっぱり気になって、赤井さんに電話して聞いたんです……』

なんかキャメルっていつもシュウと電話してない? そう思うのは私だけ?

そんな疑問を抱く。でも、それより気になることがある。

「シュウ……なんて言ったの?」

電話をしていたのなら聞いているはず、と期待に胸を高鳴らせた。けれどもその期待は簡単に裏切られてしまった。

『特に何も言ってませんでしたよ。……ただ、もう終わったんだ、って言っていました』

“もう終わったんだ”

この言葉に目の前が真っ白になる。昨日まで真っ黒とか言っていたのに。忙しい人ね、私も。

まだ朝の5時だっというのに、電話をかけてくるキャメルの非常識さに呆れることも忘れていた。

『でも赤井さん、数年前に私のせいで組織の方たちにFBIとバレてしまった時と同様、気にするなって言ってくれたんですけど……』

キャメルの声……聞こえてはいるんだけど、言葉が理解できない。

『やっぱり気にしますよね……』

もう終わってるのね。そっか……。分かっただけだけど、聞きたくなかった。キャメルに言わせといて、自分都合のいいこと思うなんてね。

『……ジョディさん？』

信じたくない。けどこれが現実。FBIって職業は真実を追い求めて、それがいくら信じられなくても事実だって認めなきゃいけない。そんな仕事をしてるのに、このごろ現実逃避し過ぎな自分がいる。

向いてないのかしら？　そもそも、この仕事に就けたのだから父を亡くした私が証人保護プログラムを受ける時の交換条件。知識だって人並みだし、失敗ばかりしてるし……日本の高校で英語教師をしている方がきつと似合ってる。

『ジヨディ……さん？』

キャメルの声が小さく、遠くに聞こえるような気がした。

episode:6 黒から白へ(後書き)

電話に出るとき、何て言えばいいんでしょう？ 私は『もしもしがキライ』というか、なんかヘンなカンジ)なので、いつも『はい？』って言うって出てますね* のでジョディさんはカメラからの電話に「はい……？」と言って出ているワケです。ご了承くださいませ > () ^

episode : 7 苛立ちと自責(前書き)

現時点で投稿済みだった6話までを段落づけ・加筆しました。一マス空けたら字が詰まっていたということに遅れて気づいて急いで改行もしました。読みにくかったですよね、本当に申し訳ありません。では、お読み下さい。

episode : 7 苛立ちと自責

あれから数時間。キャメルとの電話を終えた私は、いつもどおり出勤。職場の空気は邪気を帯びていることだろう。

安易に想像できる風景を脳内に描いて、ため息をつく。そしてポジティブに生きると誓う。けどまた、マイナスの思念が息となって口から出ていく。

前もこんなことがあったと思う。ゆっくり行ってたのに、気づくと職場についていた。毎朝、早くにね。しかし、今日はいつになく早い。

なんでこんな時にだけ早く着くのよ……。

自分に自分で嫌気がさす。居心地の悪い空気の中に、まだ楽しかった時より長くいるなんて。損な人間……。決して世渡り上手なんかじゃないわね。

そんなことを思いながら例の、職場という名の建物を見上げてみると、誰かの声が後ろから聞こえた。

「ジヨディさん？」

振り向かずとも確信できるほど聞いた声。人違いなんてするはずもないくらい聞いた声。その声が頭に響く。

「キヤメル……」

たった今、ここへ来たばかりだろうと思われるキヤメル捜査官。
この状況と全く関係ないけど彼って電話魔よね。

「ジョディさん、赤井さんとどうなりました？」

「どつって……まだ会ってないから知らないわよ」

そう冷たく返してみる。私としゃべるための話題はシュウのこと
しかないのかしら。シュウとは他愛ないことでもよくしゃべってる
くせに。

そんな些細なことにまで苛立って八つ当たりって……自分を疑う
わ。どんどん最低になっていく自分が恐い。

「キヤメル、今日は私としゃべらない方がいいわよ……」

せめてキヤメルへのダメージは最小限に抑えないと、自己嫌悪に
陥るような気がしたので申し訳ないと思いつながら忠告。

私ってずるい？

キャメルを守るため、自分自身を守るため、それだけのためだけにこんな方法を選んだ。誰も傷つかないように。誰も傷つけないように。

自分を責めないでいられるように ……。

episode : 7 苛立ちと自責(後書き)

不定期更新ですが、これからもよろしくお願いします。

episode : 8 廃れ物の矛盾 (前書き)

ストーリーの進展なんてないのでこの話は読まなくても次話への問題は無いと思います。FBIの仕事内容とジョディの心理描写だけです、それでも読んで下さる方はどうぞ > () <

episode : 8 廃れ物の矛盾

相変わらず忙しいFBI。今日も多忙なためシユウと顔を合わせる機会はなかった。

連邦捜査局、主に犯罪やテロリストからアメリカ合衆国を守ること。幼い頃、毎日仕事に行く父の背中を見ていた。けれど当時の私はまだ何もわからなくて、こんなにも罪がたくさんこの世界に転がっているなんて知らなかった子どもで。

捜査だけの毎日。と思いきや法執行の援助だってする。アメリカ合衆国憲法を保守することも任務のひとつだと以前聞いたことがある。

逮捕権はあるのに起訴権はないっていう矛盾したところもあるのが私たちが所属しているFBI。捜査はできて公訴はできない。まるで世間に私たちの存在を知らせちゃいけないみたいに。

でも、矛盾のない世界なんてない。有権者が起こした許されない罪だって多額のお金を払えば簡単にもみ消せる。ちゃんと裁かれてる人がいる中でそんな汚い手を使う人たち、そしてそれを許す人々。全て矛盾している。

今、ふと思った。なんでこんなこと考えてるんだらう。ここ最近、充実していない日々が続いているのが原因なのかしら。それとも、やっぱりシユウが傍にいないから……？

自問はしても自答はしない。答えられる自信がないから。だから自分が生み出した迷いに応じる覚悟ができれば、自分なりの答えを出してみようと思う。

私のあの明るさはどうしたのよ？

私のあのテンションの高さはどこにいったのよ？

よく考えれば、この前までの私はよく笑みを浮かべてた。近頃は全くといっていいほど笑っていないことにたった今、気がついた。

この廃れた日々の中に何かひとつでも楽しみを見つけてみよう。

小さい頃、虹を見てみようと思死に探したように。そうすれば自然と微笑みが戻ってくるはず。灰色の雨雲の日々を吹き飛ばして、あの時のように瞳を輝かせて。そうすれば私はいつまでも自分自身でいられる気がする。

明日からまた頑張ろう、と意気込んだとき、遠くからカメラの呼び声が聞こえた。

episode : 8 廃れ物の矛盾 (後書き)

次回こそはちゃんとしたお話っぽくなるはずです (^ ^ ; 読んで
下さりありがとうございました m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6563f/>

すべてはあの日の過ちから

2010年10月28日05時36分発行